



安政風聞集下

8
996
3



鳥類圖
卷之九

鳥類圖
卷之九
九十九

異鳥之圖



森光親模寫

榮富

つるの祝

此より或人出方より入るといひしもあらず

その長知より鶴の属ありて長知といふものなり

又鶴の改背身御前皆成るをいふ

後四くなく項短く鶴のまき御長くを

その大あつりのいね深ふ白き圓文ありとる

同種ありんもそより鶴といふともくも

昔知の名ふめをいふ家とを

つるのつるやうき水まの

つるのつるやうき水まのつる

安政風聞集卷之下



○津田橋門内ハ海井候長巻下株倒るは長巻ハ大巻の浪形親ハ

遠なるりしは物処ハ正頼起ありしや是又その弟實ありし

居所例渡りしは津田橋下寄津田橋方定小屋雨と大破一寄懸橋

門内ハ与助長巻巻向ハ例と渡りしは田舎長巻橋ト長橋橋門内ハ

秋長巻細川巻ありし中下天巻長巻雨のりしは原のハ由水破換多く大巻

小路極長巻巻ありし長巻巻長巻田舎長巻大破懸橋門内ハ

長巻圓ハ殿洞尾巻く長巻巻長巻雨と大破懸橋門内ハ

吹あけらむ或ハ綿巻長巻ありし長巻巻長巻雨と大破懸橋門内ハ

新由勢也とをりし長巻巻長巻雨と大破懸橋門内ハ

人由まご孫... け... 用... 記...

○小川町... 渡村院... 大木... 教...

○... 杉... 大木... 根...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...

○... 榊...



片一が稍凡きぎ而止まらば消去するは焼く如く
さぬと見る小教を志願法及々まで悉く濡ひりぬそを行ける
時彼の娘の居るを不審に家の内と隈まゝ居る小教を人受け
まが親より人の形の中小教と謂へていふせしむるんと互小
教と悩まむる小令子氏いへるやうぬは彼地養ふまじり家の法
を子と怖まて外方へ逃出さんとて居安門とあまさを横
せと更ふ小教と知るを危角する内形の時より形を令子氏い
わ女が小教と知らん為神仏小信の圃とより易若小令子とよ
まると極める候ては芒然とて目と心と小分六日目とよ
教のあ付にありと建疎ちる掬例の方小教の娘の夢とて候
さぬくと叫けるあを親よいと由小當りまがりのそぞろく

のとり見る小教あり候はむいづねとて候ひ入る形勢とあり
髪の色にかどうか髪を衣被の如く洗ふまゝと面をまがらて
かゝる人候のこゝろを眉をい被きて泣きあへらうとておと
そねがういんまふあゝとて茶とて入抱一抱ありて根を
同じも換わんとて更ふまゝとて現の如くまじりその教の
伏外ふ入あて枕と小舟海の小娘の横するよりあゝ生新も
まゝ起せるかぞく膳小付ぬ如く聖日の七角にまで目を見
あつて親めとあつてははとまじりくを親よとて
又茶とあへるまじりそが根ありしとて由同じける小分時
出りては小おあひりるやう俯の先教の風呂のわり余りふ
めけが美法さるる自由と庭の方へ走物ふ行也より年

と云ふ天上の女神の如く地球に下りて去と遊んで出入り流転する宮
庭樓閣を何れも内へあり又るみ人女まゝく如て是と遊入る海陸
衆人男ふあゝざる不教とてて答々其ま々中み女目ともあつて
其婦人と梳と双てあむるの如きもの七月ありて初て公正し〜
まづも其の元の事あり〜復とも其とも去るまじし〜人々小流
まづ必形もまゝ喜仍とて然り然らみ余う云はのり又も然りあり
是れおふ魅とまゝなるなり〜然り人形念ありまゝ無事受ふ対て入部
るふ又と物程の如く〜ん〜とまゝ
漸く云魚の如く居てまゝと見え人々の言中み居てまゝと見えれい
たふ滿くと見えども人の見ゆるのみ難く〜其の中人日の見えし如て
藝也埃のま舞とらるまを籠らるみあては目も〜とまゝ〜

まゝても藝と次教とまぐやくも是れ何れをまゝ〜其の外小怪
〜もまゝもふ候あるとまゝ〜はむも〜まゝ〜然れとも其の氣
〜と〜其のれとも然れと違へり物程の如くまゝとも然りありてま
れとまゝ〜の外ありは理とみひえ〜まゝ〜も物〜世の如
〜も竊か〜鹿子もそと遠く〜行の候乃も其の〜
○予が知己宮本橋先生とのりい武藝〜流練の入りてその中
ふゆる洲餘洲餘洲の〜り〜其意と相極めあつるふたりとて其
まはて及海洋の神夜地地り〜ふ舟夏員ある遊心縣令の門ふ入り
然る地ふ候り〜まゝ〜其とありまゝ物も然らみ其も
其屋中一統も其敷〜脱不主玉尼と修よう門付るまゝも本
見ゆる左不登門人も信〜と〜然る不先せが住る其の脱地修する

實に程修川が海軍とあるは、
移めると感ざるあり

概もは及の風あり付て、
とすりけは、
由自主とゆん、
練のする、
後の大船、
合せ、
是と、
柳橋、
丸の、

中と、
知るべし、
人あり、
はび、
平、
あり、
ま、
ふ、
ま、
あ、
お



あるまじく凡除木のせう家多し申ふ一軒吹流さきて最、意は
又くうらむと世に還の隙ありて其まが根をのりて一と又く形に
地小付塚の如く申ふ竹馬しく柄凡と破りたどきと出入のほど
せうまの林代のみじし穴あると幼きやとあひやらまそらふ
と流せしとま

○下流る村の人の叫、彼のとあひ凡屋狭く木小流本多く形は
中流りてもゆき名物の大根芋と不埋りて隙ゆかぐ家居由
く御ししよりそののひひつらまきく木とあひとあひと
勝れる且つ冷方ありて一と遊かましく不流せしとまのさ家等由門
の戸吹流さまといふてあひとあひとあひとあひとあひとあひと
とろと戸の吹流てあひとあひとあひとあひとあひとあひとあひと

と吹流さまといふと屋狭子意く吹たろさまて并よるあまひたて由叶ハ
トと流ると吹流る集め集の隙屋へ遊ばて一軒を御しせりなりは又妻の
隙屋とのあひ木の木小生え平考い丈があふ日之、あら毛
あらかけなゆり大考あひて最安極小とといふ

○一旅舎文更子の叫、木或家多て彼の凡の表なき者とも大勢
まう叫、居さうが隙も狭く遊べ凡も烈しけまひ今や一而止してぬれと
主人が止るふれせば叫、居さうらあ不表意のそと吹流さまといふ
あま吹流るは、このと遊べ、虚やあふれでゆり仕舞ふひあひ更
是向ひ子のやのまひあてあ人遊んとあひらと流石家あを
しと何処も遊ばう、着下の隅氣の志と籠のるふ流さま居さう
物らあ表不流ああまて叫けて具よとりあれあまらる安とまかて

能く人まはれぬ小遊曲なる者一人而戸一牧者小員ひおめ
後居り相の怪象を承りけんと多と大退て引籠せ一りくさん
近行り聖日彼者いさく一統の之退とて安んじば家とて
家例まて押あましとてひしお助け長よといひるとまん用者なる
小も極まると後と抱くで笑ひ一りまり

○その凡而不用をまると朽朽の考後まると愛小記一人小か
如のまの足とやや考治とらんと如うい知小天物小さうりまて海
海りとりふりのあるや病をい初簿物の小あまて用が考あるその
子の考らぬとりふとまう一十二羽の幼穉と納むと漁人是とす
及びて川も切らる考外とまふまるとる友小いひひ二百余あるのと
出来是と一日の限るとまふ小これ取のふ付ありあり一切てまて

久る者もまうりともん友小足是の年考の肯小近小人一者ま中と海
まう人の叫ぶいぬぬの奇妙の藤治とらんと或類病病の性るが
教とらうりぬい海類病小悩めるとまひつ傍の魚次を春と
て突費まを被ま法と一投ぬ一是と考せんと春とそ人小考ふ
あひるぐりおぬりてせんと春り十日余不及びまを再度病ひ狂
まうり又再例小茶法を教する共もまうりまうり又或人のまをこれと
病小の智類と海有一茶と飲と持考 考るが性か途中中後の一
茶の令と後一海りあの中食のま考もまうり考下つ彼妙小あつ見
て考る小茶法教人まは小は考せ一考のあまが海り及小あふ入
べとぬも不意後とまひつ海り途中小知ぬを人りくと終より
味をまといん身が今終の極考を忘まうり考のまうり考考と考

ふとさつろふ様もさつてまがむ申掛ありの様と母とさつろふり
ゆと輝きて侍もさつとも母のむい祥やらむお見のりく増長も
さつろふも養育の長養理飛騰うぬ男もさつろふ房がさつろふ
ひきさつこれ しょうき 又母が親ともまともさつろふとさつろふ
まが様とさつろふとさつろふのさつろふおさつろふのさつろふ
てゆりさつろふのさつろふおさつろふとさつろふとさつろふとさつろふ
ことさつろふがさつろふのさつろふおさつろふとさつろふ今日とさつろふ
寝出のさつろふのさつろふとさつろふとさつろふとさつろふとさつろふ
あてわつろふもさつろふの中とさつろふへさつろふのさつろふ
時の又さつろふのさつろふのさつろふもさつろふさつろふとさつろふ
細くさつろふさつろふもさつろふさつろふもさつろふさつろふとさつろふ

後同もさつろふとさつろふおさつろふのさつろふの大凡ゆめてさつろふ
ねは倒れさつろふさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ
さつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ
ともさつろふとさつろふとさつろふとさつろふとさつろふとさつろふ

○戒下のを人ば凡後人のむいともさつろふとさつろふとさつろふとさつろふ
一紙お摺て人ともさつろふとさつろふとさつろふとさつろふとさつろふ

用か

折は夜のねむのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ
不時英さつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ
りく後人おさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ
さつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふのさつろふ

安政風聞集卷之下
多きふとつふ宣えうらんや島秋八月廿六日大風強凡のありも又
作多の家と損ト去年の地震と様ふ適まう小島並登は六度
倍強りまは海は是れは五倍の損亡の地震のあり十倍せし
音ひしそ人の死亡の去年の十が二ふもあつて船の付あは船港船港
藉いとも怖るう死のありあまこと吾政のあり〜民ふ及ぶふあふも
あ〜もあ〜して人ふ命と損〜も〜一頁も船の形あ〜もあ〜と
助けあ〜もあ〜もあ〜の形あ〜もあ〜もあ〜廿六日の曉且ふ令〜
凡そ〜も静まり再び天月と作〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜
災ぬ〜もあ〜もあ〜の形ひ〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜もあ〜

安政風聞集卷之下

